

祈りの公益性をめぐる試論

3.11によって照り出される「宗教」の境界

同志社大学

小原克博

Overview

1. 祈りとは何か
2. 祈りと終末論
日常と非日常の裂け目から
3. 祈りの「公益性」を考えるための事例
祈りの内的力学
4. 「公益」の範囲（境界設定）
祈りの外的力学
5. テーマに対する批判的考察
「宗教」概念との関係で

1. 祈りとは何か



2. 祈りと終末論

—日常と非日常の裂け目から—

- * 神義論（ホロコースト以降、特に多様化）
- * 終末論（個人的・宇宙論的な「危機」と関係）
- * 「マラナ・タ（主よ、来てください）」
- * リスボン大地震（ルソー、ヴォルテール、カント）
- * 永井隆（1908-51）の原爆解釈

3. 祈りの「公益性」を考えるための事例——祈りの内的力学

祈りの
個人的側面と
社会的側面



主の祈り

（マタイ6:9-13、文語訳より）

天にまします我らの父よ

願わくは

御名をあげさせたまえ

御国を来たらせたまえ

御心の天になるごとく地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに遣わせず悪より救い出されたまえ

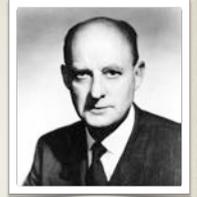
国と力と栄えとは限りなく汝のものなればなり

賀川豊彦 (1888-1960) による 「神の国」運動



- * 宗教運動は祈りの運動（『身辺雑記』1926年12月）
- * イエス・キリストは「御国を来たらせ給へ」と祈ることを教へてをられる。宗教が一つの社会性を帯びてゐることを疑ってはならない。我々はイエスの運動が神の国運動であったことを記憶する必要がある。（『賀川豊彦全集』一、474頁）

ラインホルド・ニーバー (1892-1971) の 祈り (Serenity Prayer)



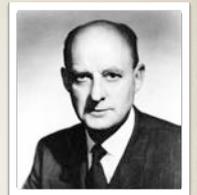
神よ、変えることのできるものについて、
それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、
それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、
識別する知恵を与えたまえ。

宇多田ヒカル Wait & See 〜リスク



変えられないものを受け入れる力
そして受け入れられないものを
変える力をちょうだいよ

ラインホルド・ニーバー (1892-1971) の 祈り (Serenity Prayer)



神よ、変えることのできるものについて、
それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、
それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、**変えることのできるものと、変えることのできないものとを、
識別する知恵**を与えたまえ。

4. 「公益」の範囲 (境界設定) ——祈りの外的力学

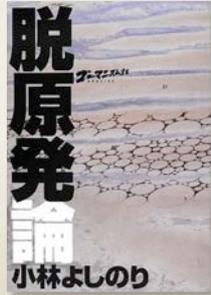
- * 政教分離：私的領域と公的領域の関係
- * アメリカ合衆国憲法 修正第1条
 - * 連邦議会は、国教を樹立し、若しくは信教上の自由な行為を禁止する法律を制定してはならない。（後略）
- * 祈りに関する以下の行為が違憲とされた
 - * 1962年、教室での祈り。1963年、聖書朗読、「主の祈り」。1992年、卒業式での牧師による祈り。

境界設定のポリティクス

- * 「公益」は自らが帰属する集団の「公益」として理解される。
- * 「このように、主よ、あなたの敵がことごとく滅び、主を愛するものが日の出の勢いを得ますように。」（旧約聖書「士師記」5:31）

5. テーマに対する批判的考察 ——「宗教」概念との関係で

- * 公益にかなう「よい宗教」？
- * 公益に還元されない
宗教の固有性は？



公益に還元されない 宗教の固有性は？

祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。(マタイによる福音書6:5-6)

「宗教の公益性」から 「公益の宗教性」の模索へ

- * 公益とは何か？
 - * 近代化によって成立した「公益」(人間中心)
- * 公益の宗教性
 - * 公益の失われた宗教的次元
 - * 自然・動物・人間の間になり立っていた「公益」

今日における哲学のさまざまなアポリアは、動物性と人間性とのあいだで還元されぬままに引き裂かれ張りつめているこの身体をめぐるアポリアと符合するのである。

(ジョルジュ・アガンベン『開かれ——人間と動物』25頁)

